令和５年度　立川市立第六小学校　学力調査等の分析について

１　児童の現状の実態と課題の把握をするための調査
（１）「令和５年全国学力・学習状況調査」の分析（小学校６年生）
（２）「東京ベーシック・ドリル（算数）」の分析（小学校２～６年生）
（３）「令和４年度東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等調査」の分析（全学年）
２　各調査の分析
（1）令５年度全国学力・学習状況調査による分析
①各教科の調査結果と平均正答率の全国・東京都との比較

国語		区分	平均正答率（%）		
			本校	都平均	全国平均
学習指導要領の内容	知識及び技能	言葉の特徴や使い方に関する事項	70.5	73.6	71.2
		我が国の言語文化に関する事項	59.5	66.5	63.4
	思考力、判断力、表現力等	A　話すこと・聞くこと	69.8	73.5	72.6
		B　書くこと	26.2	28.9	26.7
		C　読むこと	73.0	73.2	71.2
全体			66	69	67.2

算数		区分	平均正答率(%)		
			本校	都平均	全国平均
学習指導要領の領域	知識及び技能 思考力、判断力、表現力等	A　数と計算	72.6	71.0	67.3
		B　図形	49.4	54.8	48.2
		C　変化と関係	75.6	75.8	70.9
		D　データの活用	69.8	67.3	65.5
全体			66	67	62.5

②学力調査の結果分析

本校の国語の平均正答率は、全国に比べ１．２％低く、東京都に比べ３％低い結果であった。算数の平均正答率は全国に比べると３．５％高く、東京都に比べ１％低い結果であった。算数の平均正答率は比較的高い結果となったが、国語の平均正答率が低く課題がある。

国語に関して全国・都の平均を約１０％上回る事項は、「知識及び技能」の「（１）言葉の特徴や使い方に関する事項」に関する設問であった。一方、約１０％下回る事項は、「思考力、判断力、表現力等」の内容「A　話すこと・聞くこと」や「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方に関する事項」に関する設問であった。今回の「思考力、判断力、表現力等」に関する問題では、「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫できるかどうか」が問われた。つまり、①図表やグラフを正確に読み取り、②自分の考えを相手に伝え、③書き表し方を工夫しなければならなかった。この三つの課題を克服していくためには、全教科において正しく図表やグラフの読み取ることができるような指導を行う必要がある。また、グループ学習などを通して、互いの立場や意図を明確にしながら文章を書き、表現の仕方のよさを計画的に話し合ったり、認め合ったりしながら、考えを広げ、まとめたりする活動を多く取り入れ、授業改善を行っていく必要がある。また、「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方に関する事項」においては敬語についての理解が不十分であった。そこで、「相手や場面に応じて、適切に敬語を使うこと」ができるようになるために、児童の生活場面での言葉遣いを取り上げながら継続的に指導を行う必要がある。さらに、敬語を使った文章を書く活動を取り入れ、家庭学習やドリル教材などを活用し習熟を図る必要がある。

算数の「数と計算」の内容は、全国・東京都に比べると高い結果であった。一方「図形」領域の内容、「思考・判断・表現」の評価観点、「記述式」の問題形式は平均を下回る結果となった。例えば、高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係において面積の大小については理解している。しかし、その根拠となることを記述式で説明することが難しかった。今後は、解答についてその根拠となることを自分の言葉で説明できるような場面を意図的・計画的に指導していく必要がある。また（2 位数）÷（1 位数）の筆算について、図を基にして各段階の商の意味を考える問題で誤答が多かった。（2 位数）÷（1 位数）の筆算はできるが、考え方を説明したり、計算の途中の段階の意味を説明したりできるようになることが今後の課題である。そのために、ICT 機器を使って自分の考えを表現したり、ノートにまとめたり、発表したりといった様々な方法で自分の考えを表現できるような機会が必要である。

（２）東京ベーシック・ドリル診断テスト（算数）による分析（令和５年度立川市の平均と比較）
①今年度の診断テストの結果

	領域別平均正答率（%）								平均正答率	
	A　数と計算		B　図形		C 測定、変化と関係		D　データの活用			
	本校	立川市	本校	立川市	本校	立川市	本校	立川市	本校	立川市
２年	６９．６	６９．４	８８．５	９６．５	６５．４	５７．６	８６．５	９２．２	７３．６	７１．３
３年	６８．３	６６．２	３３．７	５１．１	５０．０	３２．３	３７．５	３７．４	５５．９	５７．２
４年	７２．３	７０．０	５０．０	４７．２	５８．０	６０．４	４６．０	４７．２	６６．５	６６．３
５年	６６．５	６７．８	４７．０	５１．１	５０．０	５７．６	５０．０	５９．８	５９．３	６２．４
６年	５８．３	６３．２	６０．７	５７．７	３５．７	３８．０	４５．２	５１．８	５１．６	５４．１

②令和５年度の立川市内平均または本校平均を下回った領域

２年実施【小１】	３年実施【小２】	４年実施【小３】	５年実施【小４】	６年実施【小５】
図形 データの活用	図形	測定、変化と関係 データの活用	数と計算 図形 測定、変化と関係 データの活用	数と計算 測定、変化と関係 データの活用

③課題と今後の取組。

２年生は、平均正答率は７３．６％で、市平均の７１．３％に比べ２．３％高い。特に「測定、変化と関係」領域では、市平均より７．８％高い。一方で、「図形」領域では、点をつないで形を描く問題の正答率が市の平均と比べて８％低かった。今後は「図形」や「データの活用」領域の問題に重点をおいて指導するとともに、日常生活にも学んだ内容を生かしていきたい。

３年生は、平均正答率は５５．９％で、市平均の５７．２％に比べ１．３％低い。特に、「図形」領域では、正答率が１７．４％も市平均に比べ低い結果であった。今後は、図形の問題に重点をおいて指導したり、「図形」領域の単元を丁寧に指導したりして、学力の定着を図る。

４年生は、平均正答率は６６．５％で、市平均の６６．３％に比べわずかに高い。しかし、「測定、変化と関係」領域では、面積の変化を表にまとめる問題や「データの活用」領域の折れ線グラフの読み取りの正答率が市平均より７～１０％低い結果であった。今後は、データの収集とその分析に関わる数学的な活動を計画的に指導していく。

５年生は、平均正答率は５９．３％で、市平均の６２．４％に比べ３．１％低い結果となった。どの領域でも市平均を下回った。全問正解している児童もいるので、学力差が大きいことが考えられる。算数の授業のクラス分けを慎重に行い、それぞれの授業展開を調整して、クラスの実態にあった内容にする必要がある。

６年生は、平均正答率は５１．６％で、市平均の５４．１％に比べ２．５％低い結果となった。特に、公倍数や公約数を求める問題が市平均より１５．８％、小数×小数の問題が市平均より８．１％低かった。朝学習や家庭学習などの時間を活用して、四則計算を速く、正確にできる力をつけられるようにする。

２～４年生は「数と計算」領域について、市平均を上回った。今後も毎週金曜日の朝学習の時間を活用し、東京ベーシック・ドリルに取り組むとともに、発展的な問題にも取り組ませる。また、理解が不十分な領域については、指導法を改善するとともに、反復練習をして理解を定着させる。５、６年生は、今までの学習内容を復習できるように、毎週金曜日の朝学習の時間の活用を続けたり、日常の具体的な場面に対応させたりしながら、学力の定着を図る。

（３）令和４年度　東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等調査による分析

種目	握力 （kg）	上体起こし （回）	長座体前屈 （ｃｍ）	反復横とび （回）	２０mシャトルラン（回）	５０ｍ走 （秒）	立ち幅とび （ｃｍ）	ソフトボール投げ（m）
本校平均 （全校児童）	１２．６	１７．１	３６．２	３４．２	２８．９	９．９	１２２．８	１３．１
都平均	１３．３	１６．０	３２．９	３４．５	３１．０	１０．１	１３４．１	１２．３

①「長座体前屈」は、都の平均以上の結果が出ており、柔軟性を高める運動に取り組んだ結果が表れた。授業などで全身や各部位をゆっくりと曲げたり回したりして関節などの可動範囲を広げる動きを令和５年度も取り組んでいる。「上体起こし」は都の平均を上回り、筋力を高める運動に取り組んだ結果が表れた。「立ち幅跳び」は、都の平均を下回っており、課題が見られた。「なわとび週間」を活用して縄跳びに取り組み、瞬発力や跳躍力を付けられるよう今後も継続的に指導していく。また、「２０ｍシャトルラン」も、都の平均を下回っており、課題が見られた。令和５年度の取組においては、縄跳び、持久走など、長時間粘り強く続けていく運動を取り入れ、「持久走週間」などを活用して運動を持続する力を高めるようにする。

②都平均と本校を比較し、各学年の課題と体力向上に向けた取組

各学年	各学年の課題と体力向上に向けた取組
１年	・ソフトボール投げが低い傾向にあるため、ボールを投げる場面を増やし、体全体を使った大きなフォームで投げることを意識できるようにする。
２年	・握力が低い傾向にあるため、固定器具を使った運動で握る動きを取り入れていく。
３年	・男子は２０ｍシャトルランが低い傾向にあるため、縄跳びや持久走など長時間粘り強く続けていく運動を取り入れていく。女子は握力が低い傾向にあるため、固定器具を使った運動で握る動きを取り入れていく。
４年	・男子は立ち幅跳びが低い傾向にあるため、体全体を使ったフォームで跳ぶことを意識させ、走り幅跳びや走り高跳びに取り組ませる。女子は２０ｍシャトルランが低い傾向にあるため、縄跳びや持久走など長時間粘り強く続けていく運動を取り入れていく。
５年	・握力が低い傾向にあるため、固定器具を使った運動で握る動きを取り入れていく
６年	・２０ｍシャトルランが低い傾向にあるため、縄跳びや持久走など長時間粘り強く続けていく運動を取り入れていく。